

豊かなコミュニケーション能力の育成をめざした英語学習

— 中学1年「わたしの自己紹介」の実践から —

1 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

1学期の始めに中学1年全員を対象に、「英語の授業で一番勉強したいことは何か」についてアンケート調査を行ったところ、書くこと58.7%、話すこと23.9%、読むこと13.8%、聞くこと3.6%という結果であった。この結果から生徒たちは、文字や文章を書いてみたい、自分の気持ちを英語で表現できるようになりたいという思いをもって中学校に入学してきていることがわかる。これは小学校の外国語活動で主に聞くこと、話すことを通して英語に慣れ親しんできたことを意味しており、このような外国語活動を経験してきた生徒たちが当然もつ学習意欲といえる。そして、生徒たちのこれらの学習意欲に応えるために、授業の中でも、与えられた文章を自分のことに置き換えて英作文を書いたり、YesやNoの後に自分の考えを1文付け加えたりするなどの表現活動を行っている。

しかし、自分の言いたいことを的確に表すことは中学1年にとって大変難しい。その原因には、まとものある英文を書くことに慣れていないということ、中でも言いたいことをどのように的確に英語にしたらよいかという知識と経験が決定的に不足しているということが大きいと考えられる。

与えられた話題に対して一文で表現したり、同じ動詞を使って英文を続けたりすることができる生徒は多く見受けられるが、一つの話題にそって文の構成を考え、文章を書く生徒は少ない。そのため、自分の使える表現の中からまとものある英語が書けるようになることが、「書くこと」の学習における課題のひとつである。

(2) 本単元の目標や内容と外国語活動・英語科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

英語科では言語使用場面において、何か伝えようとする事柄を既習の文法的なルール（または約束事）に則って考え、相手の表情や状況等のさまざまな要因を考慮しながら、最も適切な単語や表現を選択し、書いたり、話したりすることを通して、相手に自分の考えや気持ちを伝える力の育成をめざして授業実践を行っている。

本単元では「書くこと」に焦点を当て、「グループや学級全体の学び合いを通して、自分の使える表現を増やし、話題や構成を考えながら正しく自己紹介の英文を書くことができること」をねらいとする。

生徒たちは入学当初の授業の中で、I like, I live, I amなどを使った名刺交換ゲームを通して、簡単な自己紹介を経験している。しかし、まだこの段階では「決められた言葉」としての英語を話すのみで、文法や語彙としての認識はない状態である。

まず本単元の最初に、生徒は今までに学習してきたbe動詞や一般動詞等を用いて自己紹介文を書き、教師は、その中からいくつかの英作文を学級全体に紹介する。そして、事実を書くだけでなく、状態を表す言葉(形容詞)を使うことで、文章をより詳しくすることができるであろうということ、それをこれから学習することで今回書いた自己紹介文がより良いものになるであろうということを伝え、今後の学習の動機づけとしたい。

本単元導入部では自分の好きな教科や普段食べている朝食の話題を通して、“be動詞+形容詞”の文の形の意味と用法を学習する。これらを学習することによって、生徒が自己紹介をするために必要となる「話題」のバリエーションが広がり、「話題を選んで書く」ことが可能となる。すなわち、まとものある文章を書くための認識語彙は、ある程度出揃うことになる。

しかし、現段階では、生徒たちはそれらの表現を実際に「どのように使ったらよいか」を完全に身につけているわけではない。つまり、まだ認識語彙が使用語彙にはなっていないという状態である。この課題を解決するために、本単元では、自分のことを聞き手に伝えるためには、どのように文章を組み立てたらよいかを、グループと学級全体での学び合いの中で使えるようになった表現を用いて、「自己紹

介文」を書く活動を設定する。

生徒たちは、グループや学級全体の学び合いの中で、友だちが実際に使っている例に接し、「こういうふうに使えばいいんだ」ということが分かることによって、認識語彙から使用語彙へと転換することが期待できる。特に生徒自身に関する話題を扱うことによって、好きなスポーツのテーマから部活動や好きなスポーツ選手などに話題を広げやすく、生徒の実体験に基づいて自己表現ができるという点で、教科書の例文にはない効果があると思われる。

(3) 11年間で育てる思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

本単元のねらいである、「グループや学級全体の学び合いを通して、自分の使える表現を増やし、話題や構成を考えながら正しく自己紹介の英文を書くことができる」ためには、これまでに学んできたことを活用して書くということが前提となる。一人では思考することが難しい生徒も、グループでのかかわり合いを行い、新たな考え方や価値観に触れることで、学びの深まりが生まれると考える。

そこで本単元では、「聞き手をひきつける自己紹介を考えよう」という課題のもと、自分のことを聞き手に伝えるためには、どのように文章を組み立てたらよいかを、グループと学級全体での学び合いを通して使えるようになった表現を用いて「自己紹介文」を書く活動を設定する。「聞き手をひきつける」とは、適切な表現で英文を書き、聞き手に対して自分の考えや気持ちを正確に伝えられることを意味することと定義する。

そして、グループでの話し合いでは、生徒たちが自主的に意見を出し合い、その内容をまとめる力をつけるために、教師主導にならないように心がける。そして教師は、生徒たちの話し合いの中から、学級全体での学び合いで取り上げるべきポイントとなる発言を見極める。

学級全体での学び合いでは、生徒がホワイトボードにまとめて発表した内容を理解しやすくするために、具体的な表現を引きだすような発問をする。そして、グループの話し合いの中で出てきていた、「聞き手をひきつける自己紹介を書く上でポイントとなる発言」をこの段階で取り上げて、学級全体に学びの深まりを与える発言を引き出すようにする。

本単元終末では、学び合いによって練られた自分の考えをもとに、自分の書いた自己紹介を推敲するという課題を与え、もう一度生徒個人のレベルで学んだことから判断をして、活用してみるというところまで行う。学び合いを行ったままで終わらせず、学んだことを他の活動にも応用することができるように、生徒の学びの状況を見極めながら、実際に使う場面を設定していく。

生徒個人からグループ、学級全体へと学び合いを重ねながら新たな情報を得て、自分の考えが練られていく。その度に思考・判断・表現を繰り返すことで、思考力・判断力・表現力の育成ができるのではないかと考える。

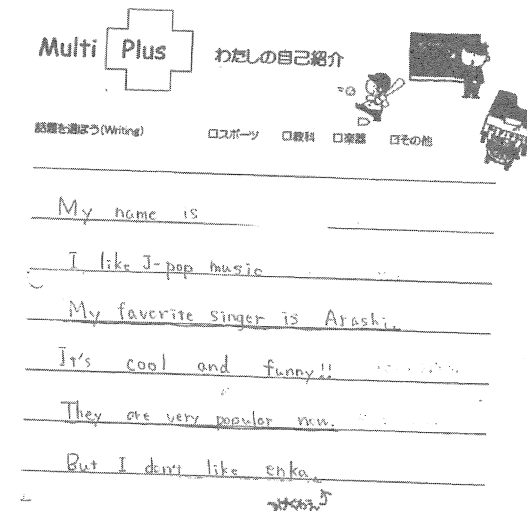
2 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学級全体の学び合いの場面）
1	自己紹介文を書いてみよう	1	・学習した内容を用いて自己紹介文を書き、友だち同士で発表する。
2	これは何？	2 3	・What is …? の文の形・意味・用法を理解する。 ◇本文の内容を理解し、ペア練習での教え合いを通して会話の中で使えるようになる。
3	好きな教科は何？	4 5	・“be動詞+(not)+形容詞”の文の形・意味・用法を理解する。 ◇辞書で形容詞を調べ、学級全体で共有することで、それを用いて簡単な英作文を書くことができるようになる。
4	朝食は何？	6 7	・What do you …? の文と応答の形・意味・用法を理解する。 ◇What do you …? を用いてペアでの会話練習を行い、学級全体で表現活動ができるようになる。

5	わたしの自己紹介 —聞き手をひきつける自己紹介を考えよう—	8	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書のモデル文を参考にして自己紹介文を作成する。 ・グループ内で自己紹介文を発表し、聞き手は工夫している点、改善点を見つける。 ◇提示された自己紹介文のうち、相手をひきつける自己紹介文を書くための工夫を見つけて全体で共有することで、それがどのようなものなのかイメージをつかむ。 ・グループ、学級全体で共有した工夫を参考にして表現の工夫を判断し、もう一度自分の書いた自己紹介を推敲する。 ◇グループ内で出た自己紹介の工夫した点などをクラス全体に発表することで自分の考えが深まり、使える知識が増え、表現できる幅が広がる。
		9	

3 授業の実際

本単元の導入として、これまでに学習してきた表現を用いて自己紹介文を書かせ、その中からいくつかを学級全体に紹介した。そして、これから「状態を表す言葉(形容詞)」について学習し、文章をより詳しく書けるようになるかと伝え、今回書いた自己紹介文をより良いものにしようというはたらきかけを行った。その他、自分の好きな教科や、毎日の朝食について、相手にたずねたり答えたりする表現活動を通して基本表現の定着を図った。ペアでドリル練習を行うことによってかかわり合い、お互いに文法上の間違いを指摘し、アドバイスをしたりしながら学習を進めることができた。



資料1

教科書に掲載されている2つの自己紹介の文の構成について学習した後、スポーツ、教科、楽器、その他の中から話題を選び、自己紹介文を作成する活動を行った。まずは、今生徒自身が書ける英語の文章はどのようなものなのかを知るために、生徒が持っている知識だけを使って自己紹介文を書いた。そのため、この時点では聞き手がいるということを意識して、工夫をした文章を書こうということだけを伝えた。そして、第5次の導入では、自己紹介文を書いたワークシート（資料1）を使って活動のふりかえりを行った。資料1は実際に生徒が書いた自己紹介文である。まず、自分が書いた自己紹介文の中で工夫をしたと思うところにアンダーラインを引かせた。この時点ではどのようなものが聞き手をひきつける工夫であるかは生徒それぞれの考えによるものである。アンダーラインを引くことができるかどうかを生徒個人で確かめさせることで、自己紹介文を書く時に、聞き手に伝えることを意識することができていたのかどうかを認識させることができた。資料1を書いた生徒は本単元で学習したfavoriteや、形容詞の表現を使って英文を書くことができ、そこにアンダーラインを引くことができた。線を引いている生徒に対しては、「なぜこの文章に線を引こうと思ったの？」とたずね、具体的に理由を言うことができるようにさせた。また、線を引くところがなかった生徒に対しても、「どのような文章を書く工夫をしたらアンダーラインが引けるのか考えてみよう」という声かけをすることで、この後「聞き手をひきつける文章とはどのようなものなのか」を考えていく学習へとつないでいくことができた。

I am Shin Tanaka. I come to school by bike.
I play soccer. I like music. I don't like snakes

資料2

My name is Emi Ito. I like chocolate.
I like tennis. I like Math. I like walking

資料3

I'm Judy Brown. I like Japanese.
Because I like talking with friends in Japanese.
Japanese is difficult but it's very interesting.
I study Japanese very hard.

資料4

「聞き手をひきつける」という表現は漠然としているので、言葉だけではイメージがわきにくい。そこで、まず教師が資料2, 3, 4の自己紹介文を提示してイメージをつかませてから、「どうしたら聞き手に、より自分の考えが伝わる文章になるのか、三つの自己紹介を参考にしながら自分の考えをワークシートに書いてみよう」という課題を与え、生徒個人に考えさせた。生徒たちは、聞き手をひきつける自己紹介を書くための工夫とはどんなことなのかを考えてワークシート(資料5)に記述してから、学級全体に発表した。始めに自己紹介文を3つ例示したことによって、それらを参考にして「聞き手をひきつける自己紹介文とはなにか」について書いていることが、資料5から読み取れる。

聞き手をひきつける自己紹介を書いてみよう!!

★聞き手をひきつける自己紹介文とはどんな文章なのか?

- 好きなこと、ものだけでなく、いろいろなことをいう。
- わかるようにいう。
- 「じゃあ、あなたは何かが好き?」とか聞き返す。
- くわしくいう。

資料5

ここでは以下のような生徒と教師のやりとりが行われた。

T: 聞き手をひきつける文章を書く工夫とはどのようなものだと思うか発表してください。
 生徒A: たとえばI like soccer.の後に理由を言う。一つの話題について書く。
 T: 話を広げるとのことかな。
 T: みんなはこの3人の自己紹介文の中で、どの文章がより相手をひきつけると思えますか。
 生徒数名: ジュディー。
 T: ではジュディーの良いところも含めて3つの文章を参考に工夫の点を教えてください。
 生徒B: エミさんみたいに、I like と続けるのではなく、ジュディーさんはBecause を使っている。
 T: 理由を言うと何がいいのですか。
 生徒B: 分かりやすい。
 生徒C: エミさんは同じlikeを使ってばらばらなことを言っているけど、ジュディーさんは理由なども言っているの、話の続きが気になる。
 T: 詳しく言ってくると、その後も聞いてみたいなあと思うのだね。

「聞き手をひきつける文章を書く工夫」というものを理解しやすくするために、3つの自己紹介文を比べてどの文章のどの部分が良いかという発問を行ったところ、資料3と資料4を例にあげて良い点を比較しながら発表することができた。また、教師は発表した生徒に対して、その理由をたずねたり、もう一度確認したりするようなはたらきかけをして、教師が生徒同士をつなぐ役割ができるよう心がけた。

生徒個人が考えて見つけた工夫に加えて、他者の意見を知ることによって、学級全体で考え方を共有し、学習を深めることができた。前もって具体的なモデル文の中から工夫した点を全員で共有したことによって、この後に行うグループ活動で自分自身が書いた自己紹介文の中から良いところや改善点を見つける段階で、その改善方法を考える手助けにすることができた。

全体で共有した「相手をひきつける自己紹介文を書くための工夫」を、自分の書いた自己紹介文の中にもあるかどうかを探し、もう一度アンダーラインを引かせた。自分が考える工夫と友達の意見を聞いて新たに得た学びとを同時に比較させるため、アンダーラインの色を、一度目に引いた線とは異なる色にさせた。やはりこの段階ではまだ学び合いを行う前であったので、線を引くことができた生徒は少なかった。

今度は学級全体の学び合いで得た学びをもとに、グループ内で自己紹介文を発表し合い、お互いの工夫している点、改善点を見つけ、各グループで出てきた意見をホワイトボードにまとめさせた。実際に具体的な例文を挙げて書かせることによって、場面に応じた適切な表現を考えることができ、判断力を育てることもつながった。話し合った内容は資料6に示した。

工夫点	改善点
<ul style="list-style-type: none"> • 理由を言う。例) Because, I have old racket. • Butをつける。例) But I don't like soccer. • Especially, Because, soなど話を続ける。 • 話題を広げる。→後が知りたくなる。 • 詳しく(細かく、具体的に)する。 • 1つの話題について話す。 • まとめ文(最後の文)を工夫する。 • 嫌いなことなども書く。 • 同じ言葉を何度も使わない。 • 動詞を変える(定番のものから違うものに)。 	<ul style="list-style-type: none"> • 同じ動詞を連続で書かないようにする。 • I like, I don't like が続きになっているから、なぜ好きなのかを書くようにする。 • もっとBecause を使った方がよい。 • もっと文をつなげるようにする(文章にする)。 • なぜなら~などの理由をつけるようにする。 • 「私は」ばかりを使わないようにする。

資料6

良いところだけでなく、自分の自己紹介文や友達の自己紹介文をこうすればもっと良くなるという改善点も思考力をはたらかせ、ふさわしい表現を判断することができた。



活動するグループは生活班で構成されているので、教師が進行役や書記役を指定しなくても自然と役割分担ができ、生徒たちで活動を進めることができた。普段は学級全体での発言が少ない生徒も、安心して活発な発言ができていたようだった。

学び合ったことをホワイトボードへ記述するという作業では、生徒にとっては学んだことの整理ができ、教師は子どものとらえを知ることができた。グループで話し合ったことを学級全体で学び合うためには、伝える内容を他者にも分かりやすくまとめることが必要となる。

生徒同士がかかわり合いながら学習するスタイルは、話し合う場面だけでなく、ホワイトボードに書く内容を考える際にも、生徒同士の意見交換を通して行えるので効果的であった。

グループでの話し合いは、生徒が中心となってかかわり合いながら、それぞれの考えを深めていくものである。教師は過度にかかわりをもつのではなく、生徒同士をつなぐコーディネーター役になることを心がけた。話し合いを始めたときには教師を頼ってくる場面もあったが、ワークシートに書いたことや学級全体の学び合いで出た意見を参考にするように伝えると、スムーズに活動を進めることができた。

次に学級全体の学び合いでは、グループでの話し合いで出た意見をまとめ、代表者が発表した。発表する生徒は自分の意見に自信をもって全体へ意見を言うことができた。そして、発表を聞いている生徒は、自分も持っていなかった意見を得たときには、資料7の「友だちの工夫していた点、まねしたい点」を書く欄に、書き加えている様子が見られた。自分の使える表現を増やそうとすることで、表現力の育成につながったと思われる。

★友だちの工夫していた点、まねしたい点、改善点はどこですか?

- Because や It's などくわしく理由をいう。
- but もつける。(形容詞)
- 動詞をいろいろつかう。

資料7

ここでは以下のような教師と生徒のやり取りがあった。

生徒D：筋の通った文章を書く。

T：これは具体的に言うとうどういうことですか？もう少し説明を加えてください。

生徒D：1つのテーマで文章がつながっている文章，聞き手が続きを聞いてみたくなるような文章。

生徒E：Because, Soなどを使って話を続けている。

T：このような言葉は文と文をつなげる役割をもっているから，文を続けるとより詳しく言えますね。

教師がすべての説明をしてしまうのではなく，生徒自身の言葉で説明させるような問いかけをすることによって，ホワイトボードには書かれていないような新たな情報を引き出すことができた。発表時に出てきた新たな表現は，文字の色を変えて教師が書き加えることで，より注目をさせたり，詳しい内容になるようにしたりした。

そして，「これは〇〇ということですか？」という生徒の考えを確認するような問いかけをすることによって，聞いている他の生徒たちもすんなり納得できた様子をうかがうことができた。このように学び合いを深めるために，グループでの話し合いの中で出てくる生徒たちの何気ない発言に注目して，全体の学び合いの場面でそれを取り上げ，適切な発問をすることを心がけた。



その他，「ButやBecauseを使う」，「How about you?を使う」等の意見も出た。これらは生徒たちが良く知っている表現であるので，定着をさせる良い機会である。今までに学習してきたことをどのように使うことができるのか，生徒自身が書いた自己紹介文を通して，確認させることができた。しかし，この段階では「〇〇を使って英文を書く」と効果的である」というところまでは到達したが，まだ認識語彙が使用語彙に変わったとは言えない状態である。

そこで，全体で共有してより学びが深まったところで，もう一度，自分の書いた自己紹介文を練り直すという活動を行った。学び合いの前後で自分の自己紹介文がどのように変化したのかが一目でわかるようにするため，同じワークシートに直接書き足したり，文章を入れ替えたりした。学級全体で学び合いを行った後に，生徒は自分で書いた英作文を再び推敲したことによって，自分が書いた自己紹介文がより良いものになったということを実感することができた。

4 成果と課題

グループでの学び合いを積極的に取り入れたことによって，生徒たち一人ひとりの発言が増え，それぞれが司会役や発表者などの役割をもって学習することができた。教師主導で生徒が受け身になる学習とは違い，生徒たち自身で改善点を見つけて意見を出し合い，その課題を解決していく学習を行うことで，自ら意欲的に取り組もうとする態度につながった。さらに教師は学び合いによって出た生徒の発言を再確認したり，より具体的に考えられるようにするための発問をしたりしたことによって，発言が一言で短く終わっていた生徒が，具体例を交えながら生徒自身の言葉で考えを述べられるようになった。これによって，聞いている他の生徒にも伝わりやすく，新たな意見として自分の考えに取り入れることができた。この学び合いを行った後も，テーマを与えて5文程度の作文を行ったが，生徒たちは今回学んだことを活かし，構成を考えて英文を書こうとしている。

課題としては，学級全体へ発表する際には，発表者対教師になりやすいので，他の生徒に意見を求めたり，生徒から質問をさせたりするなどして，学級全体の場面でも生徒たちで作る学び合いを構成する必要があるということである。そして学び合いが授業1時間だけで終わってしまわないように，継続的に行い，基礎・基本の定着と学び合いのバランスを考えながら，それぞれの授業がつながりをもって行えるような指導計画を立てていく必要があるということである。そして，学び合いで得たことが，他の単元や個の学習で活かされるような課題やタスクを与えられるように，教材開発を進めなければならない。

(文責 錦織 麻里子)